

〈研究ノート〉

## デイルタイの翻訳をめぐる雑感と覚書

宮 坂 和 男

(受付 2010年5月20日)

2010年2月下旬に日本語版『デイルタイ全集』第4巻（「世界観と歴史理論」）が法政大学出版局から上梓された。1000頁近くもある大変に浩瀚なものである。

私はこの内の100頁足らずの部分の翻訳を担当した。この翻訳の作業の過程で、とても言葉では表わすことのできないほどの大きな苦勞を味わった。私としては翻訳ははじめてではなかったが、今回の経験はまた格別のものであった。以下に述べるように、非常に奇妙なことや理不尽きわまりないことを数多く体験し、もやは人を信じることができないような気持ちになったほどである。

今回「研究ノート」という形で、翻訳にまつわる苦勞を吐露する場を得たいように思った。特定の人に対する批判を含むものになるため、非常識なことのようにも思えるが、翻訳の作業の内幕を披露する書き物があってもよいのではないかと考え、思い切って書くことにした。

またこの度の翻訳の作業を通して、デイルタイの哲学について理解できたように思えることもあったので、それを書きとめておくことにしたい。

\*\*\*\*\*

日本語版『デイルタイ全集』の刊行が計画されたのはずいぶん以前のことで、もう15年近くも前になるのではないかと記憶する。編集者の一人（以後T氏と書くことにする）から翻訳を依頼され、断りにくくて引き受けたというのが実際のところである。私としてはデイルタイの本を読んだことがなく、デイルタイの哲学についてはまったく知らなかったため、ためらいもかなりあったが、「人手が足りないのだろう」と思って引き受けた。私が担当することになったのは、今回上梓された「世界観学」の関連草稿と『シュライアーマッハーの生涯』（未刊）の一部であった。T氏からはまず『シュライアーマッハーの生涯』を先に訳すように依頼され、訳稿を少しずつ郵送するようになった。

翻訳の作業になかなか手をつけなくて時間が過ぎてしまったことは、自分としても悔やまれるところで、責任を感じている。ご多聞に漏れず、授業や会議、そのほかの雑多な校務で

手一杯になってしまい、翻訳の作業にかかるのはどうしても一番最後になってしまった。あの年の夏季休暇に着手してから、ようやく徐々に翻訳の作業が生活習慣としても定着していった。この後、まとまった時間があれば翻訳をするという生活が何年も続いたように記憶している。

翻訳の作業は難渋を極め、精神的な負担も大変なものであった。正直なところ、ディルタイの言っていることをほとんど理解できないまま日本語に直していた。手順をどのように工夫しても、とにかく時間がかかった。「ほかの仕事をしていたらどれだけ多くの成果があげられただろう」のように思って、非常に空しい気持ちにもなったが、「引き受けた以上仕方がない」と思って、観念して作業を続けた。締切を大幅に過ぎていたが、『シュライアーマッハーの生涯』の担当部分の訳出を終えた。

この直後T氏からは「続いて世界観学の翻訳にすぐにかかってくれ」、「急いでくれ」という催促を頻繁に受けた。出版社が「世界観学」のほうの出版を急いでいるということが、しばらくしてから分った。私としては内心「そういうことなら最初からその順番を言ってくればよかったのに」とも思ったが、何事についてもささいな手違いはあるものだと思い、私のほうでも締切を守れなかった負い目もあって、特に苦情を言わずに要請を受け入れた。まとまった時間ができるとディルタイを翻訳するという生活が、さらにまた数年続いた。この間T氏の催促はさらに頻繁で厳しいものになって行った。「まだ出来ていないのはお前だけだ」のような脅しをたびたび受け、嘘だろうと思ってもやはり非常につらかった。「T氏の気持ちもよく分かるが、校務ほかの都合でこちらとしてもできることには限界がある」のように思って、心の葛藤が絶えなかった。電話で口論になったこともあった。非常に大きなストレスを感じた。

仔細は省略するが、ともあれ大変な苦労を経て「世界観学」の担当部分の訳出を終え、T氏に郵送した。在外研究でドイツに行く直前のことだったから、2004年の7月か8月のことだったと思う。

\*\*\*\*\*

ドイツ滞在中は生活に非常に大きなストレスを感じ、帰国後は日本の生活や仕事にもう一度慣れるまでに大きな負担を感じた。心身ともに大きな疲労を感じながら過ごし、その後自著を上梓する等のことがあった。

この間翻訳については、T氏からは大きな連絡のない時期が続いた。いまから考えると例外的な時期であった。この間、T氏ともう一人の編集者が訳語を統一するなどの調整を行ない、私の訳稿にも修正を加えた。二人がパソコンで作業したため、私としては手を煩わせる

必要はなかった。その後T氏からは「さらに手直ししてもよい。気になるところがあれば手を加えるように」と言われ、手をつけてみたが、またしても時間ばかりが浪費されることに気づき、「なお修正すべきところが見つかったら、校正の段階で示したい」と通知した。T氏からは「校正のときに好きなように直してよい」という返事が届いた。

次に届くのは校正刷りだとこのころは思っていた。私が自分の訳稿を手渡してから3年が経とうとしていた。「あれほど『急いでいる』と言っていたのに、それとは裏腹に作業はなかなか進捗していないようだ」と思って、怪訝に感じていた。

\*\*\*\*\*

2007年5月下旬にT氏から、文書が添付されたメールが届き、読んで大変に驚いた。文書に80個ほどの項目が並んでおり、それを解説する詳しい訳注を書くように指示されていたからである。

話が前後するが、ずっと以前にT氏は「原則として訳注はつけない」と明言していた（そう書かれた手紙が今も残っている（しかも2通））。それまでに私からは、数箇所について「訳注をつけたほうがよいのではないか」と提案をしており、それに対してT氏が「訳注はつけない」と答えてきたわけである。このときには結局、「必要最低限の項目についてのみ訳注をつける」ということになった。10個程度の項目について私が簡単な訳注を書き、訳稿と一緒にT氏に郵送した。2004年7月か8月のことである。

それなのにこの度（2007年5月）、まったく逆の指示が届いたわけである。以前と話が正反対であることにT氏はまったく言及してこない。「話が違うではないか」と詰問したい気持ちになったが、訊くまでもなく推測がついたので、結局抗議はしなかった。推測するに、T氏は全集の全体に関わる取り決めについて思い違いをしていたのであろう。後日のことになるが、出版社に電話で問い合わせたところ、多くの詳しい訳注をつけることは計画の最初の段階ではっきり決められていたとのことである。T氏はこのことを知りそびれたか忘れるかしていたのである。抗議したい気持ちはあったが、T氏がすでに大変な苦勞を経ていたことも分かっていたし、「誰でも間違えることはある」とも思ったので、結局何も言わずに要請を聞き入れた。

またしても大変な難事業を抱え込まされた。次に控えているのは校正の作業だと思い込んでいたので、落差の大きさに驚いた。人に散々「急いでいるんだ」と訴えてきたT氏自身が遅れの最大の原因を作っていたことが判明して、大きなやりきれなさを感じた。3年近くもの期間がただ無駄に流れてしまった。T氏はもっと早く自分の誤りに気づくことができなかつたのであろうか。

訳注の項目はまったく馴染みのないものばかりで、調べるのに大変な苦勞を味わった。項目によっては調べるのに三日以上かかったものや、日本語の辞典類を調べても分からず、インターネット百科事典（Wikipedia）で英語やドイツ語、フランス語の解説を探したものもあった。このような作業をする間も当然のことながら校務に追われ、思うようにはかどらなかった。またこの間、新版の『講座哲学』（岩波書店）の原稿（第14巻、「テキストからの展望」）を執筆しなければならないという事情も加わり、訳注が仕上がったのは、結局、翌2008年の年明けになった。「今度こそ終わった」「次は校正だ」とこのときには思った。

同2008年10月ころ、赤や青の書き込みの入った訳稿がT氏から郵送で届き、「もう一度はじめから訳し直してくれ」という要請を受けたときには心底驚いた。T氏は手紙で非常に遠回しで不明瞭な言い方をしてきたため、最初は何を要請されているのか分らなかった。手紙をよく読んでみると、T氏等とは別に全集全体を統括する総監修者が二人おり、その人たちが訳稿をチェックして修正を命じてきたことが分かった。上述のように「今度こそ終わった」と思っていたので、要請の内容が理解できたときには、あまりのことに大変な脱力感に見舞われた。複数の大きな校務に追われていたこともあって、どうしても手をつける気にならず放置したままになった。T氏からはまたしてもメールで催促を受けたが、取り合う気にならずに放っておいた。するとT氏は私の自宅に電話してきて「とにかくやれ」「すぐにやれ」「急いでいるんだ」という話を繰り返した。

私としてももう我慢の限界を乗り越えていた。「こんなことを本当にしなければならないのか」、「なぜあらかじめ言っておいてくれなかったのか」、「大きな校務を抱えていて、とてもすぐには手が回らない」と語気を荒げて言ったが、T氏をもはや耳を貸さない姿勢を露わにし、「校務で忙しいのは理由にならない」、「つべこべ文句を言わないで、さっさとやればいいんだ」という話を繰り返した。私としてももう我慢できず声高に抗議を繰り返したが、T氏は信じがたいことに、自分の耳が不自由であることを利用し、「聞こえない」と言って私の話を遮った。T氏は自分の身体の障害を利用するという卑劣な手段に訴えて私を意のままにしようとした。ふがないことにしてやられてしまった。

電話でのやりとりから、総監修者のチェックが入ることをT氏は知らなかったことが分かった。T氏の役割として本来知っていなければならなかったことを、T氏は聞き落とししか忘れるかしていたのである。なんとも問の抜けたことである。またしてもT氏の大きな手落ちが明らかになったが、T氏はそのことにはまったく言及しようとしな。自らが誤りを繰り返して遅れの最大の原因となってきたことはすでに明らかなのに、T氏はそのことに一切触れようとせず、人には「すぐにやれ」「急げ」と命じて一方的に従わせようとしてくる。自分のミスから生じた穴を、人を奴隷扱いすることによって埋めようとするやり方は、許されるものではない。

手紙の内容や書かれた文字、電話でのやりとり等から察せられたが、このときT氏自身の精神状態はもはや普通ではなく、苦勞のあまり何やら感情が欠落したような状態になっていた。この段階に至って総監修者から修正の指令がくるとはT氏自身も思っていなかったはずである。すでにとても言葉にならないほどの大きな苦勞を経ていたところに、さらに途方もない作業を課せられて、T氏が愕然としたことは容易に想像される。その点には私も同情する。だが、T氏はやはりまず自分の誤りを潔く認め、その上で窮地を訴えて人の援助を懇願すべきだったであろう。人を一方的に従わせることによって自らが招いた窮地を克服しようとするのは、あまりにも身勝手に道義上許されることではない。私としてはT氏に対する大きな憤りをもはや禁じることができなくなった。

とまれ、自分の予定や計画をすべてキャンセルして全面的な訳し直しの作業にやむなく着手したとき、今度は私の精神状態がおかしくなった。総監修者の注文はかなりうるさいもので、まったくもってうんざりした。訳文を確定するまでの過程で乗り越えてきた問題を総監修者は蒸し返してくるため、本当に辟易させられた。総監修者の指摘を見ては、「だからそのことはすでに検討した上で訳しているのだ」と内心で何度もつぶやいた。しかも、4年以上も前に済んでいることである。またこの総監修者は、代替案を示さずに修正だけを求めたり、ディルタイ自身にすべき批判的コメントを訳者である私に向けてすることが多く、非常に困った。またさらに、「もっと直訳しろ」という注文と「もっと日本語としてこなれた文にしろ」という注文とが混在していて、大変に混乱させられた。

複数の訳者が関わるとこのように面倒なことになることは私もこれまで経験してきたし、総監修者の考えや立場も分かる。問題は、作業の手順が事前にまったく知らされていなかったことなのだ。このような作業が控えていることをあらかじめ通知しておいてくれなくては、こちらとしても予定が立てられない。あらかじめの知らせなしに、何回も突然に膨大な量の仕事を持ち込まれて「さっさとやれ」「急げ」と言われ、最後には4年前に仕上げたもののやり直しまで命じられるのは、理不尽この上ないことである。

私としてはついに怒りを抑えることができなくなり、メールでありったけの言葉をぶつけてT氏を非難した。もう自分を制御することができなくなっていた。T氏のミスについて再三問い合わせたが、T氏ははぐらかすような回答しか述べず、私の気持ちは収まらなかった。出版社に電話して問い合わせたところ、やはりT氏の誤りに間違いないことが確認された。細かいことなのでここでは述べないが、これまでのこと以外にも、T氏は全集全体の取り決めについて非常に多くの思い違いをしていたこともあらためて判明した。分かれば分かるほどチグハグなことだらけである。日本語版『ディルタイ全集』は立派な装丁から成っていて高級感を与えるが、その背後に隠れた実情は支離滅裂なことで満ち溢れているのである。

このように多くの人が携わる作業では、人の気持ちに大きな差があり、多くのすれ違いが

生じることも、この度分かったように思った。T氏や総監修者からは「大変な難業であるが、成し遂げねばならない使命だ」という思いが伝わってきた。T氏はこの点に関して私の共感を求めているような節もかなりあった。そのため、全面的な訳し直しといつてもない作業を命じてくるときにも、ためらいが小さかったのだろう。T氏の気持ちは分らないではなかったが、私としては素人として手伝っていると思っていたので、心底から共感することはやはりできなかつた。迷惑を感じる気持ちのほうがどうしても勝つた。

「自己満足的な気持ちが人の共感を得ることはむずかしい」とか「親切心からうかつに仕事を引き受けるとつてもないことに巻き込まれる」のようなことを今回さまざまに感じ、学び取つたように思った。

その後伝え聞いたところでは、ディルタイの翻訳をめぐるつては私と同様のトラブルがほかにも頻出しており、ゴタゴタ続きであることが分かつた。途中まで翻訳に携わつていたものの嫌気がさして辞めてしまつた人が何人もいるという。よく理解できるように思った。

私は正月休暇を返上して全面的訳し直しの作業を行ない、2009年年明けによつやく終了した。その後校正や索引作りという大変な作業が行われたはずであるが、それには私はまったく携わつていない。さらに1年以上も経つた2010年2月末に、よつやく上梓にこぎつたことになる。

\*\*\*\*\*

すでに述べたよつように、私はそれまでディルタイを読んだことがなく、ディルタイに関してはまったくの素人である。哲学史の解説を読んだことはあつたが、何やらはつきりしない印象しか持たなかつた。「生」や「世界観」といつたものが重要な概念であるらしいと思つたが、それが何を意味するか分からず、曖昧模糊とした感じしか残らなかつた。とにかく解釈学の潮流に属する人で、ハイデガーやガダマーに先立つ人なのだろうといふことしか知らなかつた。

この度翻訳に携わつてみて、はつきり言つて、何の話をしているのか見当もつかないよつに感じる部分が非常に多かつた。例えば、私が翻訳を担当した部分は「どのような人生観・世界観でも持つ普遍妥当性への要求と、歴史意識とのあいだにある二律背反」といつタイトルの始まつている(396頁)<sup>1)</sup>。(ぎこちない訳になつてはいるが、私の本来の訳案は別のものであつた。総監修者の指示で直訳的なものに直さなければならなかつた。)[「世界観」といつ言葉が何を意味しているのか知らない者が、このよつな箇所をいきなり理解できるわけはない。

1) 以下、本文中に括弧内で示した頁はすべて、この度上梓された日本語版『ディルタイ全集』第4巻の頁である。

翻訳者として自分は不適合ではないかとも思ったが、「専門家であるT氏が後から点検するのだから、決定的な誤りは避けられるだろう」と思って、自分に可能な限りで日本語に直す作業を続けた。ただ、この作業は非常に苦痛であった。原文が難解だったことももちろんあるが、言われている内容（事柄）を理解できないまま言葉にするのは、実際には非常につらいことで、とにかく疲れた。また私の性分で、内容（事柄）を理解しないで言葉にするという作業には、いつもためらいの気持ちが伴って、このためらいと絶えず戦わなければならなかった。

T氏からは「考えすぎだ」「時間をかけすぎだ」と再三指摘され、その点は自分でも自覚していたが、「考えすぎずにはやく訳そう」と思うとかえってためらいの気持ちが強まって、むしろ時間がかかった。精神的な葛藤が激しく、大変な心労を味わった。またこの過程を通じて、T氏が大変な直訳主義者であることが分かってきて、違和感を覚えるようになった。たしかに直訳で済ませればはやく訳することができる。立場上T氏は、「直訳でよいかからささと訳さなければ、完成はとてもおぼつかない」と思ったのであろう。そのこともよく分かったが、私としてはやはり割り切れず、精神的に非常に苦しんだ。

私が担当した部分で、一部役割を交換して、最初にT氏が訳してそれに私が手を加えた部分がある。T氏の訳を読んでもまったくの直訳で、日本語としてはほとんど理解不可能なものであった。私のほうで散々手を加えた結果、T氏の訳文はほとんど痕跡を残さなくなった。T氏の強度の直訳主義には、正直なところ非常に驚かされた。私自身経験したことがあるし、よく聞く話でもあるが、複数の者が共同で訳す場合、意見が一致することは現実にはない。さっさと作業を進めたいT氏の気持ちもよく分かるが、私の感じ方では、読み手の理解を考慮に入れないT氏の訳し方は、受け容れ難いものに思った。正直なところ「このように読み手のことを考えない人が編集者でよいのか」とも思った。

\*\*\*\*\*

私としては日本語として読める翻訳をいつも目指したが、ただ、私が翻訳を担当した部分(395～484頁、「歴史意識と世界観」)は、どう工夫して訳してもそのまま読んで分かることが期待できないものである。ただ単語だけが並んでいて文になっていなかったり、文法的に間違っただけのまま書かれている箇所が多く、とにかく全体的に意味不明なのである。それもそのはずで、この部分はそもそも完成された原稿ではなく、ディルタイが紙片に書きつけた草稿を弟子(ベルンハルト・グレートゥイゼン)が強引に活字に直したものである(826頁、訳注(1)を参照)。このような無理を経たテキストを、さらに非常に無理をして日本語に移すことにそもそも意味があるのか、疑わしいように思う。ドイツ語の原文がいかに問題を含

むものであったか、以下で例を挙げながら述べることにしよう。

ディルタイがルネッサンスについて述べているところに“Michelangelo in Graz”という箇所があり、理解できずに苦勞した。“Graz”はオーストリア中部の都市を指している以外には考えられないが、それがミケランジェロと何の関係があるのか分らなかった。さまざまな事典類を調べても分からず、同僚の美術史研究家に訊いても分らなかった。その後ドイツに滞在する機会を得たため、ケルン大学のルネッサンス研究家を捜し当てて訊いてみたところ、「妙だ。これはおそらく誤植（Druckfehler）だ。ミケランジェロとグラーツとは何の関係もない。“in Graz”の部分を除いて訳せばよい」という答えだったので驚いた（843頁、訳注（127）を参照）。ドイツ人が見ても間違いとしか思えないものが含まれているような、雑に編集されたテキストなのである。なおこの問題はT氏にもすでに告げてあったが、「直訳して置き換えておけばよいのだ」という返答であった。

また“Äternisierung”という語の意味が分からず、（日本にいる）ドイツ人に問い合わせたこともあった。そのドイツ人は、驚いたことに最初「分らない」と答え、その後「外来語辞典を調べてみる。分かり次第メールで連絡する」と言った。結局「やや綴りが異なるが、おそらくはラテン語から来た言葉で『永遠化』を意味する語であると思われる」という答えであった。ドイツ人にも理解できず、推測しなければ分らないような語を含むテキストだということである。

\*\*\*\*\*

このような紛糾した事情に鑑みると、日本語版『ディルタイ全集』の出版にどれほどの意味があるのか、正直なところ疑問を禁じることができない。「全集」という形にすると、私が担当した部分のように、そもそもドイツ語の原文としても理解しようのないようなテキストを日本語に移して収めることになるが、それを日本語で読むことにはどれほどの意味が認められるのだろうか。「全集」という形で出版すれば、全国の図書館に収められることになるから、一定の利益が確実に見込めるため、出版社にはうま味が大きいだろう。また専門家は大きな充実感や満足感を得るであろう。だが偶然それに巻き込まれる者は、途方もない難業を一方的に強いられることになる。何とも理不尽だと言う以外にない。

読者の立場に立ってみると、日本語版『ディルタイ全集』には、正直なところ大きな意味があるようには思えない。特に初学者がこれを読んでディルタイを理解しようとしても、上述したように大きな無理があることは間違いない。1000頁近くもある本を最初から律儀に読んでも、かかる時間や労力に見合う成果はとて得られない。この度上梓された第4巻に関して言えば、ディルタイが生存中に公刊された部分の訳（3～25頁、85～208頁、485～533



頁，665～760頁）から読むのが賢明であろう（訳者の解説930頁，982頁，984頁等を参照）。それ以外の部分は参考までに覗き見られるものとして考えられるべきであろう。

\*\*\*\*\*

つい長々と愚痴を書いてしまったが、散々なまでの苦労を味わったなかからかろうじて得られた利益は、ディルタイの「生 (Leben)」や「世界観 (Weltanschauung)」などの概念をある程度理解できるようになったことである。

“Leben” という語を「生」と訳すことは、もちろん誤りではないが、この訳語だけでこの概念を理解するのはむずかしいであろう。「人間が実際に生きていること」のように訳すことがもし可能であれば、そう訳すほうが望ましいであろう。人間が生きていること、その現実的で具体的なあり様は、自然科学の方法によっては捉えられない。自然科学の見方に従えば、人間の生きているあり様は、身体の構成単位である細胞に帰着させられ、さらにそれを構成する、物質の分子レベルのあり方が問題にされるであろう。実際に今日、生物学の分野ではこのような見方が優勢にすらなっている。

だがこのような見方では、経済活動や文化的創作のような人間の営みについて考えることはできないであろう。このような営みを探究する学問としてディルタイは、「歴史学，国民経済学，法学，政治学，宗教学，文学や詩作に関する研究，空間芸術や音楽の研究，また哲学的世界観や体系に関する研究，……心理学」（87頁）を挙げている。これらの精神科学を、自然科学とは根本的に異なるものとして基礎づけることが、ディルタイの最大の課題であった。

私が翻訳を担当したのは「世界観学」に関する諸草稿が集められて編集された部分であったが、そこでは、「生 (Leben)」のもつ根本的活動性を表す「生動性 (Lebendigkeit)」という概念が挙げられ、「世界観 (Weltanschauung)」や「人生観 (Lebensanschauung)」は「生動性」のさまざまな側面を表すと言われている（425頁）。そして、この「世界観」や「人生観」が芸術・宗教・哲学の形をとって現れると言われている（410頁）のを見るとき、ディルタイが「生」について考えた内実がだいたい明らかになってくる。人間が生きていることの具体的で現実的な在り方は、芸術作品や宗教の印などのなかに見出されるとディルタイは考えているのである。芸術作品や宗教の印は「生」や「生動性」のシンボルであるとディルタイは言っている（402頁，411頁）。そしてそこには、ある時代や地域に特徴的な物の見方や価値観が現れており、それが「世界観」ないしは「人生観」と呼ばれるわけである。

具体例を挙げるのが有効であろう。私が訳したなかで、次に挙げている箇所は例外的に分かりやすい部分であったように思う（もっとも原文は非常に入り組んだもので、関係代名

詞や接続詞が用いられた非常に長い文からなっていたと記憶している。いくつかの文に分けて訳さないと、とても日本語として読めるものにはならなかった。）

シュテファン教会は、今日なお、〔ウィーンという〕カトリックの大都市にあって礼拝の中心となっている……。外から見ると、巨大な石塊が、天を求める精神へと解体してゆくように見える。そこでは、物質による障害が何もないかのように、すべてが上方に向かっていく。超越的な精神主義が、みずからに完全に対応するシンボルをここに見いだしたのである。(468頁)

この世とは異なる世界である天を求め、そこに向けて精神を高めようとする、中世ヨーロッパ人の見方や価値観（世界観・人生観）が、教会のような建築物や芸術作品にあらわれているということである。

私事になるが、ドイツでの生活を経験して以来、それまで当然のことだと思っていた習慣や感じ方の多くが日本人に特有のものであることが分かった。たとえばわれわれ日本人は、共同で体験したことや周知の出来事に関して「大変でしたよね」のように言うことがある。ドイツ人から会話を習っているときに、同様のことを言うつもりでドイツ人に“Das war ja sehr anstrengend, ja?”のように言ったところ、理解されずに怪訝な顔をされたことがある。そして「それは誰にとってか」のように訊かれた。思うに、われわれ日本人は何らかの事態や状況を、個々の人から離れて存在する中立的なものとしてとらえ、それを人々が共有することができるか考える傾向が強いのではないだろうか。ドイツ人がこのように感じることもまったくないわけではないが、われわれ日本人よりもずっと少ないようである。ドイツ人の見方や感じ方では、ある事柄や状態は人によって大変だったりなかったりする。個々人が異なる者として切り離されて存在し、それぞれが違った感じ方をするという見方が根底にあるのであろう。このことが分かってからは“Das hat mich sehr angestrengt.”（私には大変だった）のような言い方をするようになった。

また、日本で日本語を習っているオーストリア人から聞いて興味深いと思ったことであるが、日本語では話し相手に向かって「あなた（Sie）」と言うことは実際には非常に珍しい。鈴木さんに向かって「あなたは……ですか」と訊くことは滅多になく、ほとんどの場合「鈴木さんは……ですか」のように言う。自分と同等か目下の人が話し相手のときに「おまえ」とか「君」のように言うことはよくあるが、親しくない相手を「あなた」という指示詞で呼ぶことは、実際にはかなり稀である。われわれ日本人には、親しくない相手を指示詞で呼ぶことは、何やら直接的すぎて憚られるのではないか。われわれは指示詞によって相手を指さすことを避け、代わりにその人の名前を挙げることによって、相手を婉曲的に指し示そうとす

る。言うまでもなくドイツ語では、“Sie”や“du”という言葉で相手を指示することはまったく自然なことで、むしろそうしなければ会話が成り立たない。

われわれ日本人は人々の一体感を求めるような見方や価値観をもっており、個々人を独立した存在と見なすのを避ける傾向が強いように思われる。「世間」という概念に関して阿部謹也が指摘したように、日本人は、個々の主体とは別に、多くの人々の意識を取りまとめるような主体が存在するように感じて、その目を絶えず気にしている。事態や状況を多くの人々で共有して担おうとして、一人一人の存在は共通の主体のなかに溶け込んでゆくかのようにわれわれは日ごろ感じているのではないか。

日本人のこのような見方や感じ方、「世界観」や「人生観」はどこから来たのであろうか。それはこれまでの歴史の過程を通じて形成されたものである。それゆえディルタイは、世界観や人生観を構成する意識を「歴史意識 (historisches Bewusstsein)」と呼ぶ (396頁)。われわれは自分の見方や感じ方を当然正しいものと見なしており、それがいつでもどこでも通用することをいつの間にか望んでいる。だが実際には、どのような見方や感じ方も、ある地域において、ある時期までに形成されてきたものにすぎず、相対的な正しさしかもたない。したがってここで葛藤が生じる。先にも挙げた「どのような人生観・世界観でも持つ普遍妥当性への要求と、歴史意識とのあいだにある二律背反」という言葉はこの葛藤を意味している。

\*\*\*\*\*

われわれがはじめから否応なく歴史に属していることを認めることは、周知のように解釈学の基本的認識のひとつである。このような解釈学的な認識は後期のフッサールのなかにも見られることが知られている。次に私自身の観点から、ディルタイとフッサールとの関わりについて分かったと思うことを書きとめることにしたい。私としては、ディルタイを翻訳する機会をもって、フッサールが解釈学的な見方をとるようになったのは、ディルタイからの影響によるのではないかと考えるようになった。中期以降のフッサールがディルタイから受けた影響は、これまで知られているよりもはるかに大きかったのではないだろうか。

周知のように、晩年の『危機』論稿のなかでフッサールは、〈歴史〉に関する考察を繰り返し広げており、中期までの思索内容からは想像もつかないようなテーマに取り組んでいる。またそこでは同時に、経験の具体的内実を意味する〈生世界 (Lebenswelt)〉という概念が提示されている。用語を見るだけでもディルタイからの影響が予想されるであろう。

この度翻訳された『精神科学における歴史的世界の構成』を読み、次の箇所に行き当たったときにはかなり驚いた。フッサールのテキストにそのまま出て来てまったくおかしくない内容だからである。

同じ対象に関わる諸知覚は、これらが同一の対象に沿って進んでいる限り、相互に目的論的連関によって関係している。ある対象の裏面あるいは内部は、これらを含まないある知覚の関係においては、ただ随伴的に志向されているにすぎない。(42頁)

ここで言われていることは、フッサールが「地平 (Horizont)」という概念によって表したこととまったく同じものである。何か物を見る場合、われわれはその時たまたま見えている現出面だけを意識しているのではなく、その物の裏面や内部、周囲をなす背景などを必ず同時に意識している。

物の周囲をなす背景地平は、最終的には「世界地平 (Welthorizont)」として存在する。「地平」について注意しなければならないのは、それが限られた範囲において存在するものではありえず、どこまでも続く無限の広がりとして存在するということである。仮に地平を一定の範囲において捉えてみたとしても、その周囲を取り囲むさらなる地平がつねに同時に考えられる。この限界をもたない、空間の無限の広がりたる「世界地平」は、〈生世界〉に属す性格の一つとして挙げられている。<sup>2)</sup> 世界地平は無限に遠くまで広がるものであるゆえ、われわれは経験をどこまで広げてもそれを知覚的現前へもたらすことはできない。上に引用した箇所ではディルタイが述べていたように、それは「ただ随伴的に志向されているにすぎない」のである。だが物が知覚されるときには、このような単に随伴するものが必ずあらかじめ与えられている。

また「地平」は、空間的にのみ存在するものではない。それは時間的にも存在するのであり、それが〈歴史〉にほかならない。われわれが文字を読むような場合、そこには歴史的地平が大きく関わっている。文字を読むとき、われわれは単にインクの染みを見ていたりゲシュタルト的なまとまりを把握しているだけではなく、視覚的映像から本質的に独立した〈意味〉を理解している。この意味理解を可能にしているのは、教育によって積み重ねられた習熟性と、その形成に与ってきた伝統や歴史である。また、文字の意味の理解に関わる歴史的地平は、太古における文字の最初の発明にまでつながっている。そして、われわれはいかに工夫しても、この文字の発明の現場に至りつくことはできない。われわれが日ごろ行っている文字理解は、知覚的経験のなかに回収されえない仕方では〈歴史〉があらかじめ与えられていることによって可能になっているのである。

このように、いかなる経験についてもそれに関わる歴史があらかじめ存在することを認める見方は、もちろん解釈学的なものであるが、『幾何学の起源』の次の箇所に見られるように、間違いなく晩年のフッサールのものでもあった。

2) Husserl, E, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Husserliana Bd. VI (Martinus Nijhof, 1976), S.146.

それゆえ幾何学の明証化とは……その歴史的伝統を明らかにすることである。ただこのような認識は、……さまざまに分化された明証の創出を、この現在から方法的に行うことを要請する……。この創出が体系的に遂行されたときに生じるのは、……歴史の普遍的アプリアリ（das universale Apriori der Geschichte）にほかならない。<sup>3)</sup>

晩年のフッサールは、歴史があらかじめ存在することを認めるに至っているのである。フッサールは引用や言及をしていないのでこれまで注意されてこなかったが、このような箇所にはディルタイからの影響が窺われるように思われる。

ディルタイからの影響を念頭において『危機』論稿を読み直せば、そこに書かれている内容はこれまでと違って見えてくるのではないか。「生（Leben）」や「世界（Welt）」、「あらかじめ与えられてあること（Vorgegebenheit）」といったことが集約的に述べられている箇所を次に見てみよう。

すなわちそれは、活動する普遍的な生（das universale leistende Leben）であり、そこでは世界（Welt）が、流れるそのつど性のなかでわれわれにとって絶えず存在するものとして成立している。<sup>4)</sup>

自然の生（das natürliche Leben）は、……普遍的な非主題的地平（Horizont）のなかにある生である。それは自然性にあってはまさに、存在者として絶えずあらかじめ与えられている世界（vorgegebene Welt）である。<sup>5)</sup>

私としては、フッサールの言う「生」は、ディルタイが言うのと同一のものを意味していると解釈したい。それは、人間が生きることの具体的で現実的なあり様のことである。そして、人間の生が経験する具体的内実は世界として与えられるが、それはまた地平として前もって存在している。

「生世界（Lebenswelt）の先所与性」ということについて、フッサールは様々な文脈のなかで述べているので、単純に理解することは難しいが、私としては何より、世界が地平として、知覚のなかに回収されえない仕方存在するという、先に見た在り方を意味していると解釈したい。世界ははじめから、知覚に帰着されえない仕方存在しているのである。

中期までのフッサールは、具体的経験を一旦排去して超越論的自我を純粹に取り出し、そ

---

3) *Ibid.*, S.380.

4) *Ibid.*, S.148.

5) *Ibid.*

の後に、この自我によって構成されるものとして経験の内実を示し出そうとしたが、〈世界〉はこのような見方によってはとらえられない仕方では存在する。経験をどこまで続けても、〈世界〉はそれを越えて存在するため、主観性との関わりには帰着されえないからである。それは主観性による構成に先立ってあらかじめ存在し、むしろ主観性に働きかけて構成を促す。後期フッサールのこのような見方は、デイルタイからの影響を大きな原因として生じたと私はいま考えている。

\*\*\*\*\*

両者の影響関係としては、フッサールがデイルタイに与えた影響が最初のものである。フッサールは『論理学研究』のなかで「記述的心理学」という学問の構想を表明し、この構想がデイルタイの大きな共感を呼び起こした。すでに見られたように、デイルタイの課題は何と言っても、人間の「生」をそのまま理解することであった。フッサールが提起した「記述的心理学」という概念は、人間の生を、それがあまに記述するための非常に有効な方法を表しているとデイルタイは考えたのである。1905年にフッサールがベルリンにデイルタイを訪ねて対談した折りに、デイルタイはフッサールを「ヘーゲル以後の最大の哲学者」とまで呼んで賞賛している。

\*\*\*\*\*

ただその後、フッサールは『厳密な学としての哲学』のなかで、デイルタイの哲学を歴史主義的相対主義の立場をとるものと見なして批判した。あらゆる学問の根本的基礎づけを構想するフッサールにとって、いつでもまず歴史が先だって存在してあらゆる認識を規制していると見なす立場、したがって、いかなる学問的認識もそれまでの歴史の過程から生じた特定の状況に拘束されていると見なす立場は、到底受け入れられないものであった。これに対してデイルタイは、フッサールを「生粋のプラトン〔主義者〕!」と呼んで批判し、これ以後両者は鋭い対立関係に入っている。

ただこの間にもフッサールは、デイルタイの『精神科学序説』や『精神科学における歴史的世界の構成』等を熟読しており、デイルタイから影響を受け続けたと考えられる。1925年の『現象学的心理学』の講義でフッサールは、デイルタイを高く評価するに至っており、デイルタイに対する姿勢を大きく変えている。

\*\*\*\*\*

両者の影響関係を論じた論考はかなり前からある。次の論考はいずれも優れた解説を与えており、今回熟読して大いに裨益された。

- ・新田義弘「現代ドイツ哲学の展開」(1976年),『現代哲学——現象学と解釈学』(白菁社, 1997年), 所収。
- ・三島憲一「現象学と哲学的解釈学」,『講座・現象学3』(弘文堂, 1980年), 所収。
- ・O・F・ボルノー(高橋義人訳)『デイルタイとフッサール』(岩波書店, 1986年)。  
なお訳者である高橋義人の解説は、本文よりもさらに精緻なもので、大変優れた論述となっている。
- ・榊原哲也「フッサールとデイルタイ」,西村皓・牧野英二・舟山俊明(編)『デイルタイと現代』(法政大学出版局, 2001年), 所収。
- ・榊原哲也『フッサール現象学の生成』(東京大学出版会, 2009年), 第II部第三章。

\*\*\*\*\*

『精神科学における歴史的世界の構成』のなかでデイルタイは、「体験(Erleben)―表現(Ausdruck)―理解(Verstehen)」という非常に重要なつながりについて述べている(95頁)。このつながりの前半部分「体験―表現」は、デイルタイ自身が述べているように、フッサールからの影響によって考え出されたものである。

「体験」とは、デイルタイが生を記述するときの基礎的単位として考えられているものである。人間が生きていることの具体的で現実的なあり様を考えようとするとき、われわれの多くは物の知覚の場面をまず思い浮かべるのではないか。だが、知覚にばかり注目すると、漠然と思いを巡らしたり何かを空想するといった、われわれの日常に属する重要な意識過程が顧みられずに終わってしまう。これに対してデイルタイは、あらゆる意識過程を包摂するものとして「体験(Erleben)」という概念を立てている。デイルタイはその具体例として、自らが夜に目覚めながら横になり、自分の年齢で始めた仕事を完成することが可能かどうか心配になるという場合を挙げている(31頁)。この場合には、物の知覚は意識過程に対して本質的な関わりをもたない。デイルタイの意識はキャビネットのなかに収められている未完成の原稿に向かってはいるが、それはいま目の前に知覚されているわけではないし、何より気がかりになっているのは、それが仕上げられるかどうかということである。たしかに意

識は対象的なものにも向かっているが、大きな比重を占めているのは、心配や悩み、疲労といった感情のほうである。対象的把握とこれらの諸感情とのむすびつきをデイルタイは「構造的意識連関」(31頁)とか「構造的関係」(40頁)のように呼んでいる。

「体験」は対象的なものが実在することや眼前に存在することを条件としない。それは、このことと関係なく意識によって直接経験されるものにほかならない。この直接的な経験を表すのにデイルタイは「この私に—とって—現存—していること (Für-mich-Da-sein)」、*「意識されて—あること (Bewusst-sein)」*、「われわれにとつて現存—していること (Für uns da-sein)」、*「われわれに—与えられて—あること (uns-gegeben-sein)」*、「*覚知されて—あること (Inne-sein)」*のような言い方を与えている(28頁, 29頁, 30頁)。

この体験が言語的に表わされたものが「表現 (Ausdruck)」であり、これによってある者の体験の内容が他の者に伝えられることになる。この「表現」という概念は、デイルタイがフッサールの『論理学研究』から借用したものである。フッサールの「表現」の概念がどのようなものであるか、ここで簡単に見ておかなければならない。

それは、フッサールが『論研』で踏み出した客観主義的イデア主義の立場に立って示されたものである。この立場は、論理法則をはじめとする論理学の研究対象を、それが経験される過程とは関係なくそれ自体で妥当するものと見なすものであった。『論研』のフッサールは、例えば矛盾律のような論理法則をそれ自体で正しいものと見なし、それは、「それを判断しながら把握する者が、人間であれ非人間であれ、天使であれ神々であれ、同一のもの」<sup>6)</sup>であると考える。この同一性をフッサールは「イデア的統一体 (ideale Einheit)」<sup>7)</sup>と呼んでいる。

フッサールは言語的な表現についてもこれと同様に考えようとする。例えば「犬」という表現について考えてみると、これを理解できない人は非常に稀であろうが、考えてみればわれわれは、犬について一人一人かなり違ったことを経験してきたはずである。われわれは間違いなく、さまざまな犬の実物や写真、絵などを見る過程を通して「犬」という語の意味を理解するようになったであろうが、そのとき見られた実物や写真は人によってまったく違うものだったはずである。だがそれにもかかわらず、「犬」という表現はすべての人に共通する同一の内容を意味しており、それゆえにすべての人に理解されうる。「犬」という語は、経験された実物や写真、またそれらの記憶像を指し示しているのではなく、同一のイデア的内容を意味しているのである。

それゆえ「表現」は、標識のような記号と違って、意味されているものとのつながりを強く感じさせる。われわれが「いぬ」と発音したり「犬」と書くとき、この音声や文字が単に偶然にではなく、何か必然性をもって犬そのものを意味しているように感じることもある。

6) Husserl, E., *Logische Untersuchungen I* (Max Niemeyer Verlag, 1980), S.117.

7) *Ibid.*



「表現」によって指示されている犬のアイデアの意味は、あらゆる犬に共通する普遍的内容であるため、それへの関わりを表現が実現するとき、そこにはある種の必然性があるように感じられるのである。このことについてディルタイは、「表現の自然的現象と、意味された対象となるものに対する表現の関係は、たんなる共在、同時的にあることではなく、内的統一なのである」(43頁)と述べている。

とまれ言語的な「表現」が与えられたとき、「体験」は他の者にも接近可能なものとなり、他の者の理解に供せられる。ディルタイは「表現」を「客観態 (Objektivierung)」ないしは「生の表出」と呼び、「生」が外に現れ出たものと見なしている(95頁, 160頁以下)。「体験—表現—理解」のつながりの後半部「表現—理解」は、このことを意味するものである。

この後半部は、前半部とは逆に、ディルタイがフッサールに与えた影響に属するものと見なされてよいであろう。晩年のフッサールの思索のなかにディルタイの解釈学の影響が色濃く見られる次第についてはすでに見たが、とりわけ『幾何学の起源』ではまさに、「表現」を介した「理解」の成立の仕組みが検討されている。よく知られているようにそこでは、ピタゴラスの定理のような幾何学的真実の内容が、場所や時代の離れた者に一体どのようにして理解されうるのかが問題にされている。そしてフッサールはこの問題に対して、明確に「書かれた言語による」と答えている。ディルタイ的に言えば「客観態を通して」ということである。

ピタゴラスの定理のような幾何学的認識は高度に抽象的で、感性的経験から離れた仕方できり立っている。位置のみを持って大きさを持たないような「点」や、長さのみを持って幅を持たないような「直線」は、現実の経験世界のなかには存在しない。「直角三角形の直角をはさんだ二辺の長さのそれぞれの二乗の和は、対辺の長さの二乗に等しい」という認識は、さらに感性的経験から離れたものである。幾何学の概念や認識は高度なアイデア性 (Idealität) を備えているのである。だがそれにもかかわらず、それは紙や黒板に書かれた不完全きわまりない図によって、また、口頭の言葉や文書を通して説明されることによって理解され伝達される。感性的経験から離れた対象も、感性的経験を通してのみ理解されるのである。

幾何学のアイデア性は (あらゆる科学のアイデア性と同様に)、それが最初の発見者の心の意識空間内における形成体であった、根源的な人格内部的起源から、いかにして客観的アイデア性に至るのであろうか。言語 (Sprache) を介してであることは前もって分かる。幾何学的アイデア性は言語のなかで、いわばその言語身体 (Sprachleib) を受け取るのである。<sup>8)</sup>

---

8) Husserl, *Die Krisis*.....S.368f.

この「言語身体」をめぐるフッサールの論究は、最終的には「文書による表現、記録を行なう言語表現 (der schriftliche, dokumentierende sprachliche Ausdruck)」<sup>9)</sup>を指摘するところに行き着いている。ピタゴラスの脳内にのみ存在した幾何学的思惟内容が、時間と場所を大きく隔てた者にまで伝達されることを可能にするのは、やはり「書かれた言語」以外にありえないのである。<sup>10)</sup>

このように『幾何学の起源』のフッサールは、書かれたテキストの読解という問題を正面から取り上げているわけであるが、これをディルタイからの影響によるものと見ることも十分可能であろう。この問題はまさに解釈学のテーマにほかならないからである。ディルタイの言う「精神科学」は、テキストをはじめとする「生の客観態」と向き合って理解を実践する学問を意味している。

精神科学は、生の客観態をその包括的な所与としている。……この客観態は、理解によってつねに体験に関係づけられる。そして体験の中で、生の統一体にとってその固有の内容は明らかになり、この内容を通じて他のあらゆるものの内容は解釈されうることになる。(162頁)

テキストを面前にした理解の実践を考察のテーマとした晩年のフッサールの思惟は、解釈学から区別がつかないような内容からなっていると言いうことができるのである。

\*\*\*\*\*

テキストの読解をめぐる『幾何学の起源』の論究は、現代哲学の諸潮流を束ねる大きな結節点を形成していると言いうことができる。周知のようにデリダは、ここに見られるフッサールの論究を周到に検討することによって「エクリチュール」という概念を構築していった。デリダが特に注目したのは、感性的経験から離れて存立している幾何学のイデア性 (Idealität) が、まさに具体的で物理的に存在する「書かれた言葉」を通してこそ理解され伝達されるという逆説的事態であった。デリダはこの逆説を正面から受け止めることによって、さまざまな概念にまつわる序列や位階を破碎する「脱構築 (déconstruction)」の手法を形成していっ

9) *Ibid.* S.371.

10) 『幾何学の起源』の内容について、詳しくは次を参照されたい。  
野家啓一『無根拠からの出発』(勁草書房、1993年)、三「フッサール現象学の臨界——「意味論的還元」から「解釈学的還元」へ——」  
拙著『哲学と言語 フッサール現象学と現代の言語哲学』(ナカニシヤ出版、2006年)、第五章二「『幾何学の起源』と「エクリチュール」の起源」

た。<sup>11)</sup>

またこれに先立って、メルロ＝ポンティも『幾何学の起源』に大いに着目していた。後期のフッサールから養分を得ていたメルロ＝ポンティがこのテキストに着目したことは当然のことと言えよう。メルロ＝ポンティもデリダと同じ箇所大きな注意を払っている。言語のイデアの意味が「書かれた言葉」によって受肉されて与えられるという弁証法的関係に、メルロ＝ポンティが注目しなかったわけではない。講義ノートにメルロ＝ポンティが書きつけていることは、まだ整理がついていない状態のものであるが、次に関連の箇所を引用しておく。

——目下のところ、フッサールは多層の現象学を保持している：感性的な外化というものがあり、それらに住みついた理念的対象がある。前者は現実世界にあり、後者は理念的なものの中にある。前者によって後者は現実世界に、さまざまな個体の中に降りてくる。

……注意：この二層はそこに並置されているのではない。言葉は二層的 Doppelschichtig である＝それは二階になった唯一の現象なのだ。各層を識別するだけでは十分ではない。それらがなぜどのようにして連動しているかを理解しなければならない。

……まさしく理念的存在は、受肉へ、世界内の存在へと差し向けるものなのだ。媒介物である言葉 Sprache。<sup>12)</sup>

\*\*\*\*\*

このように見てくると、デイルタイを現代哲学の隠れた主役と見る見方も成り立ちうるように思われる。メルロ＝ポンティやデリダがフッサールから受け継いだ問題事象は、そもそもデイルタイに発していると見ることもできるからである。また、デイルタイがハイデガーやガダマーに与えた影響については、いまさら述べるまでもないであろう。

書かれた言語表現とその読解、およびそこに伴うイデア性——このことに関する洞察は、見られてきたように、デイルタイとフッサールとのいわば共同作業によって鍛え上げられたものであった。興味深いことにガダマーは、この洞察をほとんどそのまま引き継いでいる。

テキストのなかで言われていることは、それに付随するあらゆる偶然性から解放され

11) 詳しくは前掲拙著の第六章を参照。

12) メルロ＝ポンティ（加賀野井秀一ほか訳）『フッサール『幾何学の起源』講義』（法政大学出版局、2005年）、51頁以下。

て、その十全なイデア性 (Idealität) において把握されねばならない。テキストで言われていることは、イデア性においてのみ妥当性をもつのである。<sup>13)</sup>

先にも述べたように、書き手と読み手は「犬」についてまったく異なる経験をしてきたにもかかわらず、テキストのなかで書かれた「犬」に関して同じことを理解することができる。「犬」という言語表現が、個々の犬とは異なる同一のイデア的内容を意味しているからである。

ついでに言えばガダマーは、このことと関連して、テキストの理解を書かれた事象 (Sache)・内容に限定して考えている。書き手がテキストを書いたときの心的状態を感情移入的に理解することは不可能だが、そこで言われていること (Gesagtes)、表わされている内容を理解することは可能だということである。

これは「著者よりもさらによく理解することができなければならない」というテーゼでシュライアーマッハーが主張したことを批判しながらガダマーが述べていることであり、解釈学の認識の進展を標すものであると言えよう。シュライアーマッハーによれば、読み手は、書き手がテキストを書いたときの心的状態を感情移入的に理解しなければならないだけでなく、その上でなお、書き手が自らの立場や見方に無意識のうちにとらわれていることを知らなければならない。そのとき読み手は、書き手の立場や見方が相対的なものにすぎないことを同時に知ることができ、読み手自身の立場や見方から書かれた内容を新たに捉え直すことによって、テキストを著者自身よりもよく理解することができるというわけである。<sup>14)</sup>

シュライアーマッハーのこのような考えを、ガダマーは神秘的な能力を必要とするものとして否定し、イデア的な意味内容の理解のみを認めるわけであるが、このガダマーの見方も、ディルタイとフッサールとの共同作業に由来するものにほかならない。

\*\*\*\*\*

現象学にも解釈学にも通暁している P・リクールは、この両者の関係について「現象学は解釈学の乗り越えられない前提である。他方では、現象学は解釈学的前提なしにそれ自身を構成することはできない」<sup>15)</sup>と述べ、両者が密接な関係にあることを論じている。リクールの考察は例によって精緻で周到なものであるが、ただディルタイに対する言及はない。中期

13) Gadamer, H.-G., *Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Gesammelte Werke 1 (J.C.B. Mohr, 1986), S. 398.

14) ガダマーに関する私の理解については、前掲拙著の第八章を参照されたい。

15) P・リクール (水野和久訳)「現象学と解釈学」、新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』(晃洋書房, 1978年), 316頁以下。

以降のフッサールがデイルタイから受けた影響を、これまで考えられていたよりも大きなものとなすわれわれとしては、現象学と解釈学との切り離しがたい関わりを、リクールよりもさらに密接なものとして解釈しなければならないであろう。われわれとしては、「後期のフッサールにおいては現象学と解釈学は区別しがたく一体化している」と言わなければならない。これまで見られたように、後期フッサールの現象学は、同時に解釈学として見られなければならない理解されえないのである。

2009年3月ヴッパタール大学のテンゲイ教授が来日して「生世界」に関する講演を行った(大阪大学)際、私は、デイルタイからの影響をどう見ているかについて質問する機会を得ることができた。同教授の答えは、「それについては文献的に跡づけることが難しい」、「『生世界』の概念はアヴェナリウスから引き継がれた可能性もある」といった趣旨のものであった。「生世界」についてフッサールは引用しながら論じているわけではないので、その出所を文献的に突きとめることはたしかに難しいであろう。

なおテンゲイ教授は、私の質問に答える際、上のリクールの言葉を引用して、現象学と解釈学とのつながりが密接なものであることに言及した。先のリクールの定式は広く知られているもののように思われた。だが、両者の関わりはリクールが述べたよりもさらに密接なものとして考えられなければならない。リクールの考察は、われわれが見たところとは異なることに着目するものであり、われわれの観点から見ると正鵠を逸していると言わざるをえない。デイルタイからの影響を考慮に入れて、フッサール現象学が解釈学とほとんど変わらぬものに行き着いたことが、今日では確かめられなければならないはずである。

Summary

Bemerkungen zu meiner Übersetzung von Texten Diltheys

Kazuo MIYASAKA

Vor kurzem bin ich mit der Übersetzung von Texten Diltheys (Manuskripten über die Weltanschauungslehre) fertig geworden.

In der ersten Hälfte wird über die Schwierigkeiten erzählt, die ich beim Übersetzen erlebt habe. Besonders wird über die Fehler erzählt, die mein Übersetzungschef gemacht hat. Diese Fehler haben mir nämlich sehr große Schwierigkeiten gebracht.

In der zweiten Hälfte beschreibe ich, was ich dismal von der Philosophie Diltheys verstanden habe, besonders in Bezug auf die Phänomenologie Husserls. Ich denke heute, es gibt im späten Husserl mehr Einflüsse von Diltey, als was man bisher geahnt hat.